

平成 21 年 3 月 3 1 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2008～2009
 課題番号：19720228
 研究課題名 (和文) フランスにおける「移民」イメージの構築過程—礼拝所設置運動を通して—
 研究課題名 (英文) Constructing processes of ‘immigrants’ images in France: In the case analysis of the immigrant’s movement for installation of player room
 研究代表者 渋谷 努 (SHIBUYA TSUTOMU)
 東北大学・東北アジア研究センター・教育研究支援者
 研究者番号：30312523

研究成果の概要：現地調査によって 1970 年代から 80 年代初頭にフランスのパリ郊外ノンテールに住み働いていた北アフリカ出身者が記憶にとどめている移民たちによる社会運動には、MTA (mouvement travailleur arabe) があった。彼らの活動は、パレスティナ住民の支援だけではなく、フランスの労働組合に積極的に参加していなかったアラブ諸国出身移住労働者を労働活動に参加させた。既存の労働団体とは一線を画して、労使交渉に臨んだ。また、移民たちに運動の組織化のノウハウを伝えた。

彼らの活動は十年弱で終了し、団体も解散した。しかし、彼らの活動の中心的な役割を果たした者は、以降の移民による運動の中心的な役割を果たしており、移民の社会運動が成立する基礎を形作った。

文献調査として北アフリカ出身移民第二世代を指す際に用いられることが多い「Beur」という言葉の 1987 年から 2008 年 8 月の間での Le Monde 紙上への掲載状況を調査した。掲載された総数は 1924 回だった。beur は文芸や映画と結びつけて用いられる場合が最も多く、政治や選挙と次いで結びつけられていた。さらに 1998 年にサッカーのワールドカップがフランスで開催され、フランスチームが優勝した際にアルジェリア出身移民の子どもが活躍したことから、その後このチームのことをマスコミだけではなく政治家も black-blanc-beur と呼ぶようになった。この表現は多様な出身者からなるフランス社会の統合を示すものとして象徴的に用いられるようになった。Beur にはイスラームと関連されて用いられることもあったがイスラーム主義者と対比する形で世俗的または穏健なイメージが与えられた。

以上のような肯定的なイメージとは異なり、Beur を侮蔑的な表現と関連づける大きな要因が郊外問題であり、都市暴動などの暴力であることが明らかとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19 年度	1400000	0	1400000
20 年度	1300000	390000	1690000
年度			
年度			
年度			
総計	2700000	390000	3090000

研究分野：(文化人類学)

科研費の分科・細目：(3301)

キーワード：移民、社会運動、イメージ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、1997年から1999年にかけて、フランスおよびモロッコで現地調査を行い、その成果を博士論文にまとめた。博士論文研究では、グローバル化した世界での移民の生活が、ホスト社会であるフランス社会と国境を越えた出身地との密接なつながりの中で構築されていることを明らかにした。その後、博士論文で対象とした移民たちが中心となって地域活性運動を始めた。2003年と2004年には、彼らの活動に関する予備調査を行った。その過程で、フランス社会の中で、移民は、単に出身地の外に住む者という意味では捉えられない、多様な意味が担わされていることが明らかとなった。さらに、移民たちも自分たちの権利を求めて様々な社会運動を起こしており、それがその後のフランス社会が抱く移民 (*immigres*) イメージに大きな影響を与えていることが判明した。

2. 研究の目的

本研究では、フランス社会の中で移民による社会運動とマスコミや政治家などの言説によって「移民」イメージが構築されていく過程を明らかにする。特に1970年代以降、メディアや政策などフランス社会および出身国との関係から移民の社会運動を解釈する。

3. 研究の方法

移民の社会運動とフランス社会が抱く移民イメージへの影響関係を明らかにするために新聞紙 *Le Monde* が移民の社会運動をどのように報じたのかを把握する。移民の主體的な移民イメージを明らかにするためにiv設置運動に参加した者に対するインタビューを行い、運動活動の詳細な資料を収集する。

4. 研究成果

(1) 1970年代から80年代初頭にフランスのパリ郊外ノンテールに住み働いていた北アフリカ出身者（特にアルジェリア出身者）が記憶にとどめている移民たちによる社会運動には、MTA (*mouvement travailleur arabe*) があった。この団体は、イスラエル国家建設とともに苦境に立たされたパレスティナの人々を支援する目的だった。

彼らの活動は、パレスティナ住民の支援だけでなく、フランスの労働組合に積極的に参加していなかったアラブ諸国出身移住労働者を労働活動に参加させた。既存の労働団体とは一線を画して、労使交渉に臨んだ。また、移民たちに運動の組織化のノウハウを伝えた。

彼らの活動は十年弱で終了し、団体も解散

した。しかし、彼らの活動の中心的な役割を果たした者は、以降の移民による運動の中心的な役割を果たしており、移民の社会運動が成立する基礎を形作った。

(2) ノンテール市内の市民団体の活動について参与観察を行った。この会を運営しているのは、この地域に住む28人である。そこには移民ではないフランス人とともにモロッコ出身者9名、アルジェリア出身者6名、セネガル出身者3名が含まれており、移民とフランス人とが協力して会を運営していた。

この団体は、住民の発案で始まり、発足当初は治安維持および美化を目的としていた。警察の目が行き届きにくい地域だったため、週末の夜間に見回りを行い、ゴミ拾いや落書きを消す作業を定期的に行っていた。

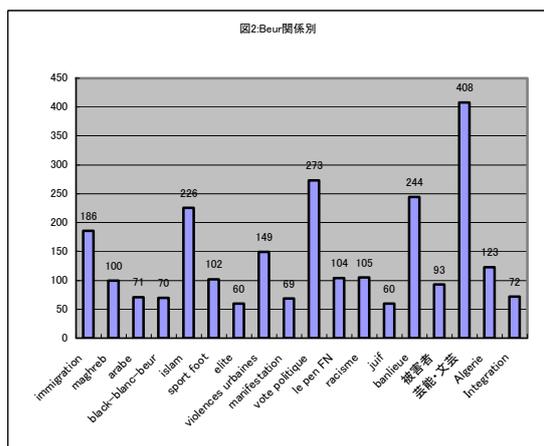
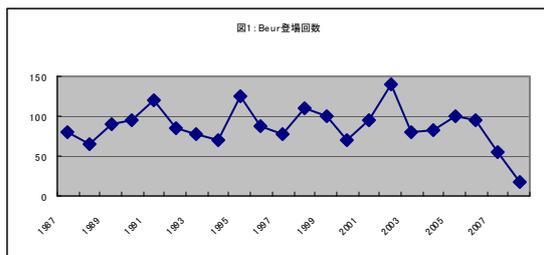
彼らの活動は、それだけに留まらず、子供達の教育や非行、失業、移民問題といった社会問題に取り組み始めた。地域の子供達のための補習授業を行い、年に数回フランス国内への遠足を行うようになった。また月に一回か二回、失業や経済、移民問題、教育に関する専門家を招き、勉強会を行っていた。

この会の活動は、ある程度の成果を収め、3年前から行政側からの資金援助を受けるようになった。そして、会の運営が住民と行政側との話し合いを通して進められるようになった。会の活動の中でも最も大きい行事は、夏に行う地域の祭りである。夏のバカンス時期にどこにも行けない子供達のために、出店を出し、子供達による劇や歌を地域住民と楽しむ機会である。そして、この祭りの意義として、学校が休みで何もすることがない子供達の非行を抑制し、さらに地域住民の間での垣根を取り払い、一体感を高めることだった。

これらの会の活動から、移民やフランス人という二項対立ではなく、一つの地域を共有している集団という意識が生まれてきており、行政側もそれを促進させようと働きかけていることがわかった。

(3) *Beur* という言葉がフランス社会で公に使われたのは、1981年にパリで *Radio Beur* が放送を開始したのが最初だった。この言葉は、1970年代にパリとその郊外地域に住む北アフリカ出身移民の若者たちの間で自称として用いられたのがその発端だと考えられている。1987年から2008年8月までに、*Le Monde* 紙上に *beur* という語がどれ

くらの頻度で掲載されたのか、どのような趣旨の記事の中に見出すことが出来たのか、さらに他のどのような語と対立または並立して使用されることが多いのかについて調べた。この期間中に beur が掲載された総数は 1924 回だった。この掲載数を年別に分けて図にしたのが以下の図 1 である。この図から分かるのは、beur が回数の頻度には年別に相違はあるものの、1983 年の beur の行進から」継続して紙上に現れていることが分かる。



beur は文芸や映画と結びつけて用いられる場合が最も多く、政治や選挙と次いで結びつけられていた。1998 年は、サッカーの世界カップがフランスで開催され、フランスチームが優勝した年だ。その後このチームのことをマスコミだけではなく政治家も black-blanc-beur と呼ぶようになった。この black-blanc-beur という表現は多様な出身者からなるフランス社会の統合を示すものとして象徴的に用いられるようになった。

Beur はイスラームと関連されて用いられることもあったが islamiste と対比する形で世俗的または穏健な beaur の宗教活動について論じられていた。

Beur を侮蔑的な表現と関連づける大きな要因が郊外問題であり、都市暴動などの暴力だろう。Banlieue といった「郊外問題」と beaur との関連を報道する記事は 244 例を占

めている。その中には学業不振や失業率の高さを報道するものもあれば、大麻など薬物の密売や常習といった内容の記事が含まれていた。このように郊外に関する問題との関連が beaur に対してマイナスのイメージを与えていることは確実である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

渋谷 努 「在仏モロッコ移民の国境を越えた社会関係と国籍-帰化による法的地位と差異の制定-」『白山人類学』11、P51-68、2008 査読あり

渋谷 努 「フランスにおけるイスラーム恐怖症と北アフリカ出身移民による「イスラーム」イメージ再修正の試み-」『東北人類学論壇』7、P38-61、2008、査読あり

渋谷 努 「在仏モロッコ移民の国境を越える結婚式と immigré イメージ」『ヨーロッパ基層文化研究』3 号 (印刷中) (査読付き)

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○ 出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○ 取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渋谷 努 (SHIBUYA TSUTOMU)

東北大学・東北アジア研究センター・教育

研究支援者

研究者番号 : 30312523

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :